

VII 教育実習についてお尋ねします。

1. 教職課程の一部に、2週間の教育実習がありますが、この実習は教職課程履修の中で、あなたにとって精神的にどのくらいのウェイトがありましたか。
- a. ほとんど全部 b. 3/4くらい c. 半分くらい d. 1/4くらい
e. 0に近い

その要因はなんですか。(複数回答可)

- a. 教育実習の期間が短かった
b. 教育実習の期間が長すぎた
c. 実習先(中学校)の先生の指導が良かった/先生とうまくやっていた/良かった
d. 実習先(中学校)の先生の指導が良くなかった/先生とうまくやっていた/いけなかった
e. 生徒とうまくやっていた
f. 生徒とうまくやっていた/いけなかった
g. 授業がうまくできた
h. 授業がうまくできなかった
i. 課外活動や行事で生徒をうまく指導することができた
j. 課外活動や行事で生徒をうまく指導することができなかった
k. 実習生が自分一人だったのでどうしたらよいか困った
l. 他の実習生とうまくやっていた
m. 他の実習生とうまくやっていた/いけなかった
n. 就職活動の時期と重なってしまった
o. その他(詳細を書いてください)

2. 教育実習前と後では、自分は内面的に変化したと思いますか。

- a-1. かなり変化した a-2. 少し変化した b. 変化しなかった

* 「a-1」あるいは「a-2」と際は加味してください。

どのように変化しましたか、変化した理由は実習の中のどのどのような要素だと思いますか、今もその変化が継続していますか、できるだけ詳しく書いてください。

VIII 短期大学における教職課程の存続についてどう思いますか。

- a. 存続させた方がいい 理由()
b. 廃止してもかまわない 理由()
c. どちらともいえない

IX 教職課程の履修あるいは教員免許取得に関して、ご意見、ご感想があれば書いてください。

ご協力ありがとうございました。

V 短期大学英語学科で教職課程を履修し、教員免許を取得したことが生活をどうえ役立っていますか。

- a-1. 大いに役に立っている
a-2. 少しは役に立っている
b. 今のところ、役に立っていない
c. わからない(判断できないを含む)

* 「a-1」あるいは「a-2」と際は加味してください。(複数回答可)

1. 教師、塾講師(など)以外の就職の際に有利であったから
2. 職場で配属の参考になった(らしい)から
3. 一般的な教養として役に立っているから
4. 自分の人生設計の上で役に立っているから
5. 自分の子供の教育全般で、参考になることがあるから
6. 自分の子供の英語教育を考える上で参考になることがあるから
7. 教員免許をもっていることで、自分に自信が持てるから
8. その他(詳細を書いてください)

VI 教職科目についてお尋ねします。

1. 短期大学で履修した教職科目のうち、どの科目が役に立っていますか。上位3つを選び、その順に(1),(2),(3)と書いてください。「ない」場合には「なし」に○をつけてください。

- () 教育の理論 () 教育心理 () 教育史 () 教育方法
() 英語科教育法 () 道徳教育 () 特別活動論 () 生徒指導論
() 教育実習 I (中学校での実習) () 教育実習 II (事前事後指導)
() なし 理由()

2. 現在の社会的状況をふまえて、上記以外に学習したい、あるいは学習する必要がある科目(内容)があれば書いてください。

[資料]

(C)短期大学の例)

短期大学における教職課程に関する調査

お名前 () 電話番号 ()
ご住所 ()

※ 記号、番号は○で囲み、()は記入してください。

Ⅰ 短期大学英語学科を卒業されてから、別の教員免許を取得しましたか。

a. はい b. いいえ

※ 「a. はい」と断りかきで断ってください。

① どのような免許ですか。(複数回答可)

- [英語] 1. 中学校教諭一種普通免許「英語」
2. 高等学校教諭一種普通免許「英語」
3. その他(詳細に書いてください)

② どのように取得されましたか。

1. 四年制大学に編入して
2. 四年制大学に編入後、大学院に入學して
3. 通信制の大学に入學(編入)して
4. その他(詳細に書いてください)

③ その際に、二種免許を取得していることが役に立ちましたか。

1. 二種免許取得時の単位がほとんど認められたから役に立った
2. 二種免許取得時の単位が一部認められたから役に立った
3. 二種免許取得時の知識が役に立った
4. なんとなく役に立ったような気がする
5. 役に立たなかった

Ⅱ 教員免許と仕事についてお尋ねします。短期大学卒業後、下記の仕事についていたことがありますか。

- a. 教諭 ① 7. 公立 イ. 私立
② 7. 小学校 イ. 中学校 ウ. 高等学校 エ. その他()
③ 教科 ()
④ 時期 ()から()まで

b. 学習塾の講師

- ① 教科 () ② 塾の規模 約()名
③ 時期 ()から()まで
④ 7. 採用の時点で免許を取得していたことが大いに役に立った
イ. 採用の時点で免許の有無は問われなかった

- c. 学習塾の経営 ① 塾の規模 約()名
② 時期 ()から()まで
d. 日本語教師(外国人への日本語教授) 時期()から()まで
e. 家庭教師 時期()から()まで
f. その他(仕事の種類や内容を詳細に書いてください)
()

Ⅲ 仕事の内容にもよりますが、もし将来、教員免許(英語)を必要とする仕事があったら、就きたと思いますか。

- a. 就きたい
b. 就きたいとは思わない(その理由)
c. その他(詳細に書いてください)

Ⅳ 教職課程と学生生活についてお尋ねします。

1. 教職課程を履修する際に、困ったことや悩んだことがありますか。
a. 自分の学力不足、知識の不確かさを痛切に感じた
b. 時間的に忙しすぎた
c. 教育実習が不安であった
d. 教育実習と就職活動が重なってしまった
e. その他(詳細に書いてください)
2. 教職課程を履修する際に、良かったことがありますか。
a. 履修はハードであったが満足感を味わうことができた
b. 勉強の目標が持てた
c. 相手の気持ちを理解する努力が重要であることがわかった
d. 教育実習でいい勉強ができた
e. その他(詳細に書いてください)

- (2) 鈴木（1997）で、教育実習が役に立ったと記述した回答者が多かったことによる。
- (3) このことに関しては、Uchida & Mitsuo（1998）などがある。
- (4) 1998年12月1日に実施された「教育職員免許法の一部を改正する法律の施行に伴う説明会（第3回）」における説明による。

参考文献

- 赤星晋作「短期大学における教員養成～小・中学校教員養成の意義と課題～」『九州女学院短期大学学術紀要』第18号、1993年、23-34頁
- 大石靖子・鈴木純子・小高晋二「私立短期大学英語・英文系学科における教職課程の現状とその分析」『桜美林短期大学紀要』第33号、1997年、69-92頁
- 清水一彦・赤尾勝己・新井浅浩・伊藤稔・佐藤晴雄・八尾坂修『教育データランド'95—96』時事通信社、1997年
- 鈴木純子「教職課程は役に立っているか—短期大学英文科卒業生の調査から—」『和洋英文学』第28号、1997年、11-19頁
- 日本教師教育学会『98改正教免法・同施行規則及び関連資料』1998年6月27日
- 山本禮子「最近の教員養成をめぐる」『英文学科ニュース』19号、和洋女子大学人文学部英文学科、1998年、5-7頁
- Ikuo, Uchida & Mitsuo Sadayuki, "What Aspects of English Should Student-Teachers from Junior Colleges Improve before their Practicum?" 『日本大学薬学部研究紀要』第36巻、1998年、7-31頁

鈴木 純子（短期大学部英語文化学科助教授）

田島 富美江（東京立正女子短期大学教授）

満尾 貞行（短期大学部英語文化学科非常勤講師）

短期大学によっては、1998年の教免法改正を機に教職課程を廃止するところがあるかもしれない。編入して教員免許を取得することを希望する学生にとっては、短期大学における教職科目単位がゼロであるために、編入後2年間で卒業と同時に免許取得することはほぼ不可能となるであろう。しかし、上述のように教職科目が卒業要件単位として認定されるならば、編入希望者は短期大学在学中にそれを見込んで単位を取得することもできる。しかし、教職課程履修者が極端に少ない場合は、教職課程担当の専任教員2名を雇用することができずに廃止するというケースもあるかもしれない。経済性のみで教職課程の存廃についての判断を下して欲しくはない。

V まとめ

短期大学に教職課程が設置されているにも関わらず教諭として採用されることがほとんどない、という現状から、教員免許が役に立っていないという厳しい批判がある中で、本調査は実施された。調査の質問項目作成には慎重に取り組んだが、質問項目に説明が十分でないと思われるものがあつたり、回答者により免許取得後の期間に差があつたりし、まだ改善の余地があつたように思われる。

教職課程を履修した者の意見としては、各設問の結果が示すとおりである。例えば、設問5においては、約2/3が自己の生活に役に立った(役に立っている)ことが判明したし、設問8においても約2/3が存続を希望し、設問9では約40の肯定的コメントが得られている。また、教育実習は、設問6において最も役に立っている科目として1位を占めていることから、実社会との接触を通して多くを学んだであろうことは容易に推察できる。また、「苦しかったが…」、「ハードであったが…」という前置きは確かに、懸命に取り組んだ結果、ようやく免許状を取得することができたという回答者達の達成感を強力に印象づけている。このような教職課程履修者たちのひたむきな努力は十分評価すべきであり、その姿勢は履修者本人の人格形成に大いに役立っていると確信していて、その点においては短期大学の教職課程に意義を認めることができる。課題で論じたことが実現されれば、教員採用の如何に関わらず、教職課程はさらに充実してその存在は確実なものになるであろう。

本稿で論じたことがら以外にもまだ課題は残っていると思われる。それらについては今後の研究で明らかにして行きたい。

注

- (1) 【教育データランド 95-96】、1995、129頁

が担当している授業の中でも、初歩的な文法の誤りを発見することもあり、学生の英語力に懐疑的になってしまう場合もある。英語力は高ければ高いほどいいが、英語科教育法担当者は「教育実習には最低でもどの程度の英語力が必要であるのか」⁽³⁾という疑問を常に抱き、「実習に行く前にはそれだけは身に付けさせなければならない」と焦りを感じるのである。

98改正教免法の特徴のひとつに、中学校教員免許取得に必要な「教育実習」が3単位から5単位に増加したことがある。このことは実習期間が2週間から4週間に延長されることで、短期大学の関係者にかなりの動揺を来している。実際、教育実習を行う学生は講義を4週間も続けて欠席することとなり、いわゆる Semester 制を採用している多くの短期大学においては、学生は出席時数不足等により教育実習以外の科目の単位取得が困難になることも予想される。文部省の説明会⁽⁴⁾においては、4週間を連続ではなく、2週間ずつに分割して実施することが可能であるという見解が示された。短期大学側としては別々の学期に、しかも2年次前期と後期の実施を望むものである。先の理由の他に、夏季休暇中に、2回目の教育実習に備えて、たとえ僅かであっても「実力不足」を改善することができるからである。また、そうなれば教職科目の一部を未履修のまま教育実習を行うことは避けられることになる。

設問4あるいは7における回答のように「実習と就職活動が重なってしまい困った」との指摘もあった。現在は多くの学生が6月に教育実習を行っているからである。今後、教育実習が4週間になると、就職活動は全くできないことになり、現在に増して混乱することが予想される。教諭としての採用が皆無に近い現状では就職活動を見捨てることもできないのであるが、多くの短期大学では実習中の就職活動は禁止している。

短期大学で取得した二種免許上進を目的として、あるいは、教職を志望して、四年制大学に編入する学生にとって、短期大学で取得した単位が認定されなければ、編入の価値は半減してしまう。98改正教免法では、四年制大学において一種免許を取得するためには教職科目として31単位を取得しなければならない。卒業要件単位を取得するだけで精一杯であり、21単位の現在でも教職を断念している学生もいる。2年間で31単位を取得することはほぼ不可能である。3年次編入後3年をかけなければ教員免許が取得できないとなれば、それだけで編入することあるいは免許取得を諦めてしまう学生もいるであろう。仮に、短期大学で取得した教職科目の単位が一部でも認定されれば、編入生の負担も多少は軽減されることになるが、これも設問1で既に述べたように都道府県、大学により対応も異なっているようだ。

比較した赤星（1993）によれば、前者による評価では、「自分達は四年制大学卒の教員に比べて多面的、総合的思考において劣っている」という結果もそれを裏付けていると言えよう。

そのような能力を養うためには、カリキュラムにゆとりを持たせ、学生自身が積極的・自発的に生徒指導、教科指導の研究に取り組む方向づけが必要となるであろう。短期大学における教授内容の改善、教授法の質的向上を目指して、ゼミナール方式を採用すること（赤星、1993）も一案といえよう。書物により知識を獲得し、討論やフィールドワークなどを通じ、物事を多面的、総合的に考察し、独自の判断へと導くことを習慣づけられるであろう。又、教員の負担は大になるが、授業のない春休みに課題を与えてじっくり検討させることも一案であろう。

最近の複雑な社会情勢を考えるならば、教育は学校教育にのみ委ねられることではなく、生まれた瞬間から死に至るまで関わりをもつ家庭教育や社会教育との連携において成り立つものであることを見逃すことはできない。

現在では学校教育に携わる者だけが教職課程という特殊なカリキュラムを履修することになっている。しかし、1997年に神戸で起きた衝撃的な事件によって、家庭教育のあり方、心の教育の必要性などが見直されるようになってきた。

教育をグローバルに見るならば、家庭教育や社会教育に関しても、家庭内外で次世代の育成に携わるであろうすべての学生が、何らかの形で学んでおくべきことであると考えられる。社会学系科目として、教育に関する科目が開講されるならば、教職課程履修者以外の学生も履修が可能である。現在、短期大学では教育関係の科目が従来的一般教養科目としては開講されておらず、教職課程履修者のみが履修する科目として扱われている。98改正教免法では教職科目を卒業要件科目として単位認定することが可能になっているので、それが実施されれば、希望者は教職課程履修の有無に関係なく、教育関係の科目を受講することができる上に、教職課程履修者の多忙感も多少は減少させることができるのではないだろうか。

本調査では回答者の多くが「学力不足を痛感した」ことが判明したが、回答者がこのことを一番痛切に感じたのは主として教育実習時であると推測される。指導案の作成、教材準備、授業の運営をひとりで行わなくてはならないからである。短期大学の英語科教育法の授業、特にその授業で行われるマイクロティーチング（模擬授業）では、英語の表現の誤りや発音の不備などの指摘から授業の運営の仕方まで細かく指導してもらえるが、実習先では大まかな指導は受けられても、細かいところまでは指導、指摘してもらえないことが多い。筆者ら

なった」というような感想も多かった。その他、「履修者は少人数で、目標が明確だったので、学生同士、連帯感・協調心・励まし合いの精神が芽生えた」、「履修したことにより、短大生活そのものが充実していた」、「教師にならなくとも、教職課程で学んだことを役立てる道はたくさんある」、「教職課程を履修することにより家庭教育にもプラスに働くと思う」等々、教職課程の内容に、自らプラスの評価を与えた意見が大半を占めていた。

以上の肯定的意見のほかに、少数ではあるがつぎのような意見の記入も見られた。「使えない免許なら不要」、「あまりに忙しすぎて、学生としてやりたいことができなかつたのが残念」、「忙しすぎて、教職科目のみならず、短大全体の履修科目の学習が全て中途半端に終わってしまった」、「授業は知識の授受でなく、思考力の養成方法を探れば、教職課程もさらに魅力的」等々が挙げられる。「使えない免許なら不要」とする意見は、明らかに否定論であり、数としては少ないが、本稿では議論し尽くせないほどの大きな問題と考えられる。他は、教授内容や指導法に関する提言、カリキュラムに対する不満、改善点であり、今後、教職課程をさらに充実させていく上で大いに参考になると思われる。

IV 今後の課題

短期大学英语・英文系学科における教職課程をさらに意義あるものとするために、本調査で提起された課題について論じてみたい。

設問9の記入回答の中に「忙しい」という表現が再三にわたり使用されていたのが特徴的であった。1988年の教免法改正による単位数の引き上げで、授業に拘束される時間が増加したことは確かである。教職課程履修者は卒業要件の一般教養科目と専門科目の授業の他に、教職科目の勉強に励まねばならなかつたからである。このように時間に追われるようなカリキュラムでは、しばしば教授内容の授受に終始してしまい、本調査回答者の記述に見られたような「授業では思考力の養成を…」という要望が出るのは当然のことであろう。98改正教免法では、更なる単位増により、教職課程履修者の多忙感はますます高じるであろう。知識の授受による授業だけで終わってしまうならば、教員養成の観点からは不十分である。なぜならば、教師は生徒を人として育成していくことがその主たる仕事であり、生徒指導・教科指導を問わず、生徒のひとりひとりにそれぞれ対応が異なるからである。知識の授受形式の授業では、時間内にあらゆる事態に対応できるだけの基礎知識を与えることは不可能である。ある1つの知識を類似の状況の中で適用させる能力、つまり思考力、応用力、判断力を身につけさせることが必要である。短期大学卒の教諭と四年制大学卒の教諭の資質能力や姿勢を

た数値である。この表10からは、内面的に変化した度合が大である者ほど教育実習が役に立っているとする傾向にあることは明らかである。これらのことから、教育実習がもたらした変化はプラスの変化であると解釈してよさそうである。

以上のデータから判断するに、本設問で「精神的ウエイト」について定義した上で回答者に提示したわけではなかったが、結果として、筆者らが当初意図したように、実習中の様々な体験はもちろんのこと、実習前の不安や実習後に感じた内面的な変化などすべてを包括して回答したことが推測できる。

設問 8 短期大学における教職課程の存廃について

表11からわかるように、60名(69.8%)の者が積極的に「存続を希望」しており、「廃止してもかわまない」とする者はわずか3名にすぎない。その理由として前者は、設問7にもあったように「自己の成長」、「教えることの経験の尊さ」を挙げる者が多かった。なかには「教職を履修することによって進路が決められた」、「一層教員になりたいと思うようになった」というような「将来の進路決定のため」とする意見もあった。後者の理由の多くは「教師になるには短大の2年間では短すぎる」、「短大卒では中学校の教師になれない」というものであった。「どちらともいえない」との回答理由は、実習で得たことは大きいがと前置きしながら、「廃止してもかわまない」と同様の理由を挙げ、メリットとデメリットの板挟みになっている状況がうかがえる。

表11：教職課程の存廃について

選 択 肢	人数
a. 存続を希望	60
b. 廃止してもかわまない	3
c. どちらともいえない	19
d. 分からない	3
無回答	1
計	86

設問 9 教職課程の履修あるいは教員免許取得に関する意見・感想 (自由記入)

本設問に対して、50名から記入が得られた。自由記入のため記述は多方面にわたり、前出の設問、とくに4、5、7と重複する部分も多く見られた。また、1名の記述の中にも数項目の併記が見られたので、それらを適宜整理してみた。

「苦しく、ハードであり、時折挫折しそうになったが、履修中の充実感、終了後の満足感が格別で、その時に得た知識や体験が今でも役に立っている」という趣旨の意見が最も多くみられ、また、「時間的余裕がなかったが、実習後は自己の成長に気づき、大きな励みと

ができなかった、(3)英語力や指導力等の実力不足を感じた、等があると思われる。

比較的多かった選択肢に「実習期間が短かった」があるが、これは要因というよりむしろ感想であると思われる。これを選択した者の回答を詳細に見ると、その多くが「先生（生徒）との人間関係がうまくいった」と回答しており、その結果、2週間の実習が楽しいと感じている間に終了してしまったというケースではないかと推測される。この選択肢は、実習期間が長すぎて精神的ウエイトが大に、あるいは短くて精神的ウエイトが小になるのではないかと推定して設定したものである。

7-2 教育実習後、内面的に変化したか

内面的に変化をしたと回答した者は、「かなり変化した」が26名（30.2%）で、「少し変化した」が49名（57.0%）であった。「変化しなかった」者は9名、無回答は2名であった。その変化の内容は、「自分に自信がついた」（12名）、「生徒からの期待感、責任感といったものを感じ、それが糧となっている」（11名）、「精神的に成長した、自分の至らない点があった」（7名）、「教える、教えられるという両方の立場を体験し、物の見方が広がった」（6名）、「教えることの大変さがわかった」（23名）、「中学生に対する見方が変わった」（3名）、「自分が教師に向いているかがわかった」（4名）であった。これらのコメントから、教育実習をとおして自分自身を顧みて、物の見方も変わり、大きく成長した一方、教職の大変さ、厳しさを実感したのである。マ

イナスの変化を示すようなコメントは全くなかったことから考えて、この変化はプラスの変化であると言えよう。

内面的変化と精神的ウエイトとの関係は、表9が示すとおりで、内面的に変化した者

は教育実習の占める精神的ウエイトが大であるという傾向がうかがえる。次に、設問6の役に立っている教職科目との関係をみると、表10のようになる。短期大学別にa-1、a-2、bごとの平均を算出したものである。設問6で算出した方法で求めたポイント合計を人数で割っ

表9：精神的ウエイトと変化の度合い（83名中）

選 択 肢	全部	3/4	1/2	1/4	0	計
a-1 かなり変化	13	9	2	1	0	25
a-2 少し変化	20	17	8	4	0	49
b 変化なし	2	4	3	0	0	9
計	35	30	13	5	0	83

※いずれかの設問に回答しなかった者がいるので、本表の合計は表7の合計とも、設問7-2の合計とも異なる。

表10：内面的変化の度合いと教育実習のポイントとの関係

	a-1 かなり変化	a-2 少し変化	b 変化なし
A短大	2.5	1.4	—
B短大	2.5	2.3	0.6
C短大	2.2	1.8	0.8

表7：教育実習が占める精神的ウエイト

	a.ほとんど全部	b.3/4くらい	c.1/2くらい	d.1/4くらい	e.0に近い	無回答
人数(名)	35	31	13	5	0	2
割合(%)	40.7	36.0	15.1	5.8	0	2.3

表8：教育実習の精神的ウエイト—その要因(複数回答可/無回答2名)

選 択 肢	a. 全部 35名	b. 3/4 31名	c. 1/2 13名	d. 1/4 5名	e. 0 0名	合計 84名
a. 実習期間が短かった	11	9	9	0	0	29
b. 実習期間が長すぎた	0	2	1	0	0	3
c. 先生の指導が良かった/先生とうまくできた	21	15	6	4	0	46
d. 先生の指導が良くなかった/うまくできなかった	1	7	1	0	0	9
e. 生徒とうまくできた	21	19	9	2	0	51
f. 生徒とうまくできなかった	3	0	0	1	0	4
g. 授業がうまくできた	10	9	4	0	0	23
h. 授業がうまくできなかった	12	12	1	1	0	26
i. 課外活動/行事でうまく指導できた	4	4	2	2	0	12
j. 課外活動/行事でうまく指導できなかった	6	10	4	1	0	21
k. 実習生が一人で困った	4	1	1	1	0	7
l. 他の実習生とうまくできた	15	16	8	2	0	41
m. 他の実習生とうまくできなかった	0	1	0	0	0	1
n. 就職活動と重なった	5	6	5	1	0	17
o. その他	8	7	2	1	0	18

精神的ウエイトの大きさとして「ほとんど全部」(13名)または「3/4」(7名)を選択している。このことから、教育実習の前から抱えている不安も精神的ウエイトに反映されていることが推測される。そして、その不安の対象のほとんどが授業と、先生や生徒との人間関係ということになる。

授業に関しては、「授業がうまくできなかった」を選択した者の数が、「うまくできた」を選択した者の数よりわずかではあるが多くなっている。授業がうまくできれば満足感から、そうでなければ反省や後悔の気持ちから、精神的ウエイトが高くなることは予想がつく。ただ、どのような基準で「授業がうまくできた」か「うまくできなかった」かの判断を下したかは、英語科教育法の担当者である筆者らには疑問となる。研究授業ではすばらしい授業をした者が「授業がうまくできなかった」と回答している者がいるからである。その理由としては、(1)短大で指導された授業方法と実習先で要求された方法が異なった、(2)さまざまな現実的な問題のため、自分が計画したペースで、あるいはその問題に対処した授業を行うこと

てほしい」というものであった。このことから、実習生が生徒との人間関係に悩んでいることが推測できる。98改正教免法では「教育相談（カウンセリングに関する基礎的な知識を含む。）の理論及び方法」が教職科目として含められるようになり、この点では学生の希望が叶えられることになるといえよう。

もうひとつ、「パソコン」を挙げた者が目立った。回答者が短期大学に在学した時期は今から3～8年前であり、当時の短期大学におけるパソコン教育の状況を考慮すれば納得がいくであろう。家庭へのパソコンの普及も進み、短期大学におけるパソコン教育も盛んになっている現状をふまえれば、98改正教免法で「情報機器の操作」が新設されたことは社会一般の要望が容れられたといえよう。

設問7 教育実習について

回答者たちにとって、教職科目の中で教育実習が一番役に立っているだろう⁽²⁾という予測のもとに準備したのが本設問で、ここでは一般的には表に出て来にくい面に焦点をあててみた。

7-1 教育実習が占める「精神的ウエイト」

「精神的ウエイト」については学生個々により異なる場合があることが予想されたため、敢えて定義はせずに質問をした。その結果、教育実習が占める精神的ウエイトは表7が示すとおりとなった。

精神的ウエイトは表7が示すように、回答者の多いほうからa、b、c、d、eの順となり、66名（76.7%）が「ほとんど全部」あるいは「3/4」を選択した。ウエイトが大であることが良いか否かは別として、回答者にとって教育実習が占める精神的ウエイトが大であることが判明した。そして、その主要因は、「実習先中学校の先生の指導が良かった／先生とうまくやっていけた」、「生徒とうまくやっていけた」、「他の実習生とうまくやっていけた」というものであった。それらに次いで多かったのが「授業がうまくできた」と「授業がうまくできなかった」であった。これらを見ると、先生、生徒、他の実習生との人間関係がうまくいった場合と出来不出来に関わらず、授業そのものが精神的ウエイトに大きく関わっていることがわかる。

設問5に「教職課程を履修していて困ったこと」を尋ねた際の選択肢のひとつに「教育実習が不安であった」というものがあり、これを選択した者が25名いたが、そのうちの20名が

2ポイントとして計算した。その結果、選択した科目は表の「ポイント」欄の数値になり、いずれの短期大学の場合も教育実習が最高ポイントを示した。順位については「選択者数」の場合とほとんど変わりはない。

これらの2種の数値から、中学校での教育実習が最も役に立っていることが判明した。役に立った科目を選んだ理由の記述は少数であったが、「人間関係について学んだから」という回答が多かった。生徒や先生と接することにより、大学では経験できない人間関係を経験することができたからであろう。また、「教えることについて学んだ」という者もいて、就職してから後輩に指導する際に、また、人前で話す時に、教育実習の経験が役に立っているとしている。前述のように、回答者はほとんどが20代で、家庭をもっている者はほんの少数であるが、将来家庭をもち、子供が学齢に達すると、教育実習の経験はさらに意義のあるものとなるであろう。なお、「役に立っている科目はない」とした者が全体で12名(14%)いたが、その理由は「現在、教師になっていないので」というコメントが示すとおり実際には役立っていないからであろう。

ところで、教育実習は、ある意味で教職課程の集大成ともいうべきもので、短期大学においては2年次の11月頃に実施されるのが望ましいと考える。しかしながら、主に実習先の中学校の都合により、最近では2年次の6月頃に実施されることが多くなった。それゆえ、2年次に履修する科目については、半ばで、あるいは未履修で実習を行うことになり、それらの知識は活用されないことになる。

選択者数およびポイントのいずれの場合においても、「教育原理」、「教育史」はほとんど役に立っていないと感じている。どちらかといえばこれらは教養的な科目であり、それぞれの講義で学んだことが実習中あるいは卒業後に、直接的に役に立っていると自覚することがないからであろう。教育実習や英語科教育法が血や肉であるとすれば、これらの教科は骨というところであろうか。将来、教育を大局的に把えるような場合には大きな意味をもつことになると思われる。

6-2 学習したい、あるいは、学習する必要がある科目はあるか (自由記入)

この設問には全体で30名(34.9%)が回答した。科目(内容)はさまざまであったが、なかでも目立ったものとして「カウンセリング」、「心理学」、「道徳」、「いじめについて」などがあつた。実習で生徒をどう指導したらいいか、どう付き合っていくたらいいかに悩んだ様子が伺える。筆者のひとりが本年と昨年、教育実習を終えた学生に対して教職課程全般に望むことを尋ねた際の複数の回答が「生徒指導や道徳教育について短期大学で具体的に指導し

表6-1:役に立っている科目 (A短期大学) 17名

科目名	選択者数	ポイント
教育実習	3	13
教育心理学	2	11
学校カウンセリング	2	7
教育原理	1	2
英語教育法	2	4
教育史	1	2
道徳教育	1	1
視聴覚教育	2	1
特別活動指導法	1	1
なし	2	
無回答	1	

図1-1

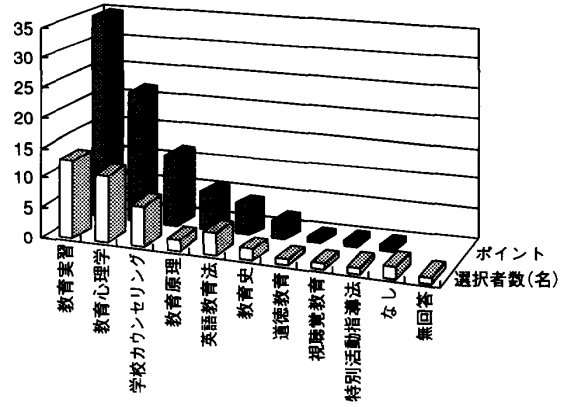


表6-2:役に立っている科目 (B短期大学) 44名

科目名	選択者数	ポイント
教育実習 (中学校)	2	34
実践研究 (実習準備)	1	19
英語科教育法	2	16
教育心理学	2	14
生徒指導論	2	15
道徳教育の研究	2	5
教育方法論	2	4
特別活動論	2	4
教育原理	2	1
教育史	2	0
なし	3	
無回答	1	

図1-2

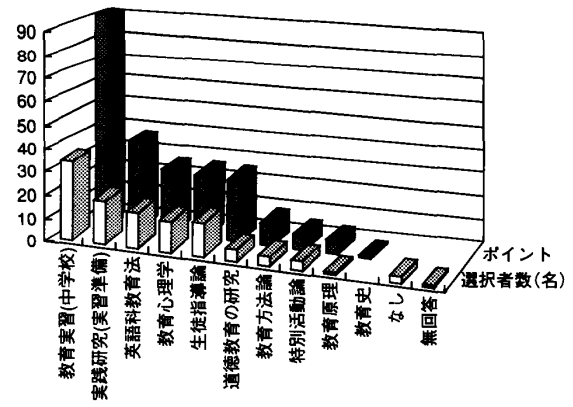
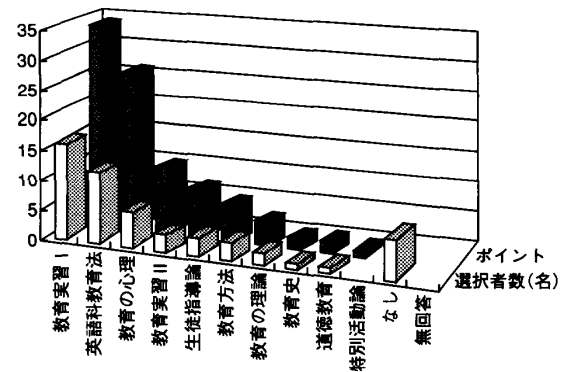


表6-3:役に立っている科目 (C短期大学) 25名

科目名	選択者数	ポイント
教育実習Ⅱ	2	16
英語科教育法	2	12
教育の心理	2	6
教育実習Ⅰ	1	3
生徒指導論	2	3
教育方法	1	3
教育の理論	2	2
教育史	2	1
道徳教育	1	1
特別活動論	1	0
なし	7	
無回答	0	

図1-3



※ 科目名欄の数字は単位数を示す。

え、教職科目（最低は15単位）を履修しなければならず、「時間的に非常に忙しい」ことになる。たとえば、筆者のひとりが勤務する短期大学では、数年前に教職課程履修者は共通教養科目（従来的一般教養に相当する）6単位を卒業要件以外の単位として取得することが義務づけられた。

また、「一年次の英語の成績が一定以上であること」、「英語の実力テストに合格すること」など多くの短期大学において教職課程履修の条件が課せられている（大石他、1997）が、本調査の対象となった短期大学でも同様で、学生は多くの単位を取得し、さらに成績による条件のために、教職課程を履修しない学生と比較すると当然のことではあろうが、勉学に多くの時間を割かねばならないことになり、多忙感はいっそう増すことになる。「授業をこなすだけで精一杯であり」、「大学の講義でもっと深く掘り下げて考えることが必要であった」ということになるのであろう。また、四年制大学の学生と比較しても修学年限が2年短いこと、短期大学で受ける教育期間が実習前に1年少々しかないことなどから「学力・知識不足を痛感し」、学生から教師へと立場が逆転する「教育実習が不安であった」ことは当然といえよう。

設問6 教職科目について

この設問では、どのような教職科目が役に立っているか、また、教職課程履修上、他にどのような科目を学習することが望ましいか、を尋ねた。

6-1 どの科目が役に立っているか

この小問では、教職科目を役に立っている順に1から3までの番号をつける方法で回答してもらった。短期大学により開講されている教職科目が異なるために、本項目のみ短期大学ごとに集計した。

まず、順位に関係なくそれぞれの科目を、1位から3位のいずれかに選択した回答者の数を掲げたものが表6-1から表6-3の「選択者数」の欄に示す数値である。3校のいずれにおいても中学校における教育実習が1位で、半数以上の回答者が選択している。2位以下は短期大学により多少異なるが、英語科教育法、教育心理学であった。

次に、順位をみると、多くの回答者が1位に挙げている科目が教育実習であった。順位の状況を明確にするために、回答の1位を3ポイント、2位を2ポイント、3位を1ポイントとして合計ポイントを算出してみた。順位の記入がなく、○のみ記入した回答は、すべてを

本設問ではこれら11名を除いた75名を集計の対象とした。

その結果、「a—1. 大いに役に立っている」者が11名、「a—2. 少しは役に立っている」者が37名、「b. 今のところ役に立っていない」が18名、「c. わからない」が9名であった。そこで、a—1、a—2と回答した48名に対し、どのような点に役に立っているかを尋ねた結果が表4である。

このうち「一般的な教養として」が最も多く、ついで「自信が持てる」であり、その他の項目は、この2項目に比べ極端に低くなっている。「一般的な教養として」と回答した者について、数名に「具体的にはどのようなことか」と電話で質問したところ、「マスコミ等の教育に関する報道内容について興味・関心を持つようになった」ことを挙げた。本研究は1990年度入学者から1995年度入学者までを対象としたため、年齢的にも最高で20代後半であり、子育て未経験者がほとんどであることを考えればこの順は当然のことといえるかもしれない。鈴木（1997）は40～50歳の短期大学卒業生を対象とした調査で同様の質問を行ったが、「子供の教育全般で」という回答が最多であった。これは、年齢差により生じる生活体験の相違によるものであり、実際に次世代を育成する立場として、この回答が得られたことは容易に理解することができる。

設問5 教職課程を履修して良かったこと・困ったこと

表5—1：良かったこと（複数回答可）

選 択 肢	人数
a. 満足感を味わえた	50
b. 勉強の目標がもてた	21
c. 相手の気持ちを理解する経験	18
d. 教育実習がいい勉強になった	55
e. その他	10

表5—2：困ったこと（複数回答可）

選 択 肢	人数
a. 学力・知識不足を痛感した	62
b. 時間的に忙しかった	23
c. 教育実習が不安であった	25
d. 教育実習と就職活動が重なった	18
e. その他	3

教職課程を履修して良かったこととしては、表5—1が示すように、「満足感が得られた」（58.1%）と「教育実習でいい勉強ができた」（64.0%）に高い数値が見られた。前者は教員免許を取得することができたときの感想であり、後者は不安を抱いて望んだ教育実習で多くのこと（「教育とは何か」、「外国語を教えることの難しさ」、「教育とは心の通じ合いであること」等）を学ぶことができたという自己の成長に関する言及であった。

一方、最も困ったこととしては、表5—2が示すように「学力・知識不足を痛感したこと」であった。教職課程履修者は短期大学の2年間に、卒業に必要な単位（最低は62単位）に加

教員免許を必要とする仕事があれば就きたいかという設問に対しては、表3が示すとおり、57名(66.3%)が「就きたい」と回答している。

「就きたくない」と回答した者は、「既に別の仕事に従事し、その仕事にやり甲斐を感じている」、「教職以外の仕事に就きたい、教職で学んだことはその仕事の中で生かしたい」、また、「自分は教員に向いていないことがわかった」というように明確な理由を挙げている。その反面、「教育現場はますます複雑になるであろうし、卒業後、英語や生活指導面の勉強を続けていないので自信がない、不安である」、「受け入れ先がないのではないか」、という消極的な回答も多かった。

「その他」と回答した者の多くは、「就きたい」という気持ちがあるにもかかわらず、「実力不足で不安」、「指導力に自信がない」、「将来の指導法・教育法の変化について行けないので」というように、教職に対する自分の力量に不安を抱いている者が多いのが特徴的である。

表3：要免許の仕事に就きたいか否か

選 択 肢	人数
a. 就きたい	57
b. 就きたいとは思わない	18
c. その他	11
計	86

表4：免許が役に立っている点(複数回答可)

選 択 肢	人数
1. 教諭、塾講師以外の就職に有利	2
2. 職場で配属の参考になった	3
3. 一般的な教養として	34
4. 自分の人生設計の上で	8
5. 子供の教育全般で	8
6. 子供の英語教育を考える上で	6
7. 自信が持てる	25
8. その他	3

設問4 教職課程履修と免許取得が生活上役に立っているか

二種免許を取得しても教職に就くことが非常に厳しい現状であるが、教職に就かなければ、教職課程履修は無駄であると考えられるだろうか。無駄でないとするれば、どのような点で役に立っているかを問うたのが、本設問である。

「役に立っている」と回答した者が59名(68.6%)いた。この中に上種の免許を取得した者と免許が必要と思われる仕事に就いた者が11名いる。免許を上進した者はその免許が、そして、設問2に該当する仕事に従事した(している)者はその経験が、それぞれ本設問の回答時に影響を及ぼしていることが予想される。その場合には、短期大学での教職課程履修および二種免許取得がいかに役立っているかに対する本設問の主旨に反することになるため、

られたのである。しかし、現在では、都道府県により、また大学により異なるが、教職科目単位の認定が僅かではあるが可能になってきている。ところが、四年制大学卒業と同時に一種免許を取得するには、卒業要件単位と教職科目単位の取得に追われ、充実した研究活動ができるかどうかは疑わしい。また、四年制大学の中には、3年次編入後3年かけなければ教員免許を取得させない大学もある。このような状況であるから編入生のなかには教職課程の履修を断念してしまう者もいる。

表1：卒業後の他免許の取得の有無

選 択 肢	人数
a. 取得した	2
b. 取得していない	82
c. 履修中	2
計	86

表2：従事したことのある仕事
(複数回答可)

選 択 肢	人数
a. 教諭	3
b. 塾講師	4
c. 塾経営	1
d. 日本語教師	1
e. 家庭教師	3

※対象は二種免許のみの取得者である。

設問2 教員免許を必要とする(と思われる)仕事に従事したことはあるか

本設問は、教諭(臨時採用も含む)として教職に就いたことのある(就いている)者の数と、塾講師になる場合にどれほど教員免許所持に関心が持たれているかを調査することが目的であった。表2の数値を見ると、「教諭」は3名(3.4%)であり、二種免許を取得した者の教職への道がいかに困難であることを示している。因に、1994年3月に私立短期大学を卒業した者で、中学校教諭として正式に採用された者は158名⁽¹⁾であった。ただし、この数値は全教科を対象としているので、英語の教員数はこれよりはるかに少なくなるのである。このことから、二種免許所持者の採用が僅少であることは明白である。

また、塾の種類にもよるであろうが、回答者たちが仕事を得た小・中学生対象の「塾講師」でさえ免許の所持が役立ったのは4名中2名で、他は免許所持については問われなかったという。このことは、教員免許は教諭になる以外にはほとんど有効でないと考える風潮があることを物語っているといえよう。

設問3 教員免許を必要とする仕事があれば就きたいか

を卒業要件単位として認定することが難しい学科等では、逆に厳しくなったように思える。

本稿では、調査結果をもとに、98改正教免法も考慮に入れながら、短期大学英语・英文系学科における教職課程の意義と今後の課題について論じてみたい。

Ⅱ 調査方法

1. 対 象

東京都内および近郊の三短期大学の英語・英文系学科にて、1988年改正の教免法のもとで教職課程を履修し、教員免許を取得した者（1990年4月以降入学した者で1997年3月までに卒業した者）のうち、連絡可能な者を調査の対象とした。A短期大学45名、B短期大学86名、C短期大学31名の計162名となった。

2. 方 法

アンケート方式の調査紙（資料参照）を作成し、1997年9月半ばに発送し、10月半ばまでに回答の返送を依頼した。

Ⅲ 結果と考察

全体で86名の者から回答を得た。回収率は53%である。短期大学により回収率及び回答者数に差はあったが、全体の傾向を探るには支障がないとみなして集計・分析した。

以下、設問ごとに集計結果を提示し、解説を加えてみたい。

設問1 短期大学卒業後、別の免許を取得したか

表1に示されているように短期大学において二種免許を取得した後、更に上種の免許を取得した者は2名（2.3%）であった。このうち1名は通信制大学で、1名は四年制大学で取得したものである。また、調査実施中に履修中の者も2名で同じく1名は通信制大学に、1名は四年制大学に在籍していた。この4名共、編入時に短期大学での教職科目の単位が一部認定されたり、短期大学における教職課程履修時に獲得した知識が役立った（役立っている）と記述している。

過去においては、短期大学から四年制大学に編入した際、短期大学で履修した教職科目はその単位の認定がほとんどなされなかったため、編入後、中学校教諭一種免許を取得しようとする場合には、いわゆる一般教養科目の不足分を補い、専門科目を履修し、その上に教職科目を新たに履修し直さねばならないという非常に過密なスケジュールをこなすことが強い

短期大学英语・英文系学科における教職課程の意義と課題

——三短期大学の卒業生への調査に基づいて——

鈴木 純子・田島 富美江・満尾 貞行

I はじめに

1988年の教育職員免許法（以下、教免法という）改正により、教職に関する科目（教職科目）の単位数が引き上げられ、また教職科目および専門科目の内容の一部が変更になった。それを機に、中学校教諭二種普通免許「英語」（以下、二種免許という）取得者の実力では十分でないなどの理由により教職課程を廃止した短期大学があった。その後も、教諭に採用されないという現実をふまえて、教職課程を廃止したところもある。

二種免許を取得しても、実際に教諭として採用される数が極めて少ないことや、英語（外国語）科の教師は他教科と異なり、指導力以前に、英語そのものの力量が問われるので、短期大学卒業程度の英語力では教員としては不十分であることは、多くの短期大学の教員が認識している。その一方で、教職課程の履修を希望する学生が存在することに加え、教職課程を設置することが資格志向の時代には、学生募集上有利に働くであろうという理由で、教職課程設置の必要性を主張していることも事実である（大石他、1997）。また、教職課程履修（特に、教育実習）は自分の子供を教育する際に役立っているとする免許所持者も多く（鈴木、1997）、それなりの意義はあるように思われる。

そのようななかで、短期大学の英語・英文系学科において教職課程を履修し、二種免許を取得することにはどのような意義があるのか、また、教職課程を存続させるならば、さらに意義あるものにするためにどのようなことが必要とされるのか、について確認するため調査を実施することにした。

折りも折り、1998年7月に教免法が改正（以下、98改正教免法という）になり、教職科目の単位数が引き上げられた。教職科目を卒業要件単位として認定することが可能になったこと、教科に関する科目の単位数が削減されたことなど、教員免許取得の条件が緩和された反面、教育実習の単位増は短期大学の教育現場にかなりの衝撃を与えているし、教職科目単位